

4年生段階における新学習指導要領を見据えた
国語科授業実践
－新聞というメディアを基軸として－

大阪市立豊新小学校
教諭 池住 祐亮

目次

I. 問題の所在

1. 問題の所在・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 新聞というメディアを基軸とするアクティブラーニング
の授業展開の構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

II. 新聞というメディアの発信力を生かした授業展開

― 1 学期の授業実践 ―

1. 協働学習導入の授業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 新聞というメディアの発信力を生かした授業実践― (1) ―・・・・・・ 1
3. 新聞というメディアの発信力を生かした授業実践― (2) ―・・・・・・ 2
4. 新聞というメディアの発信力を生かした授業実践― (3) ―・・・・・・ 2

III. メディアの発信力を生かしたアクティブラーニングの授業実践

1. メディアの発信力を生かした
アクティブラーニングの授業実践― (1) ―・・・・・・ 3
2. メディアの発信力を生かした
アクティブラーニングの授業実践― (2) ―・・・・・・ 3
3. メディアの発信力を生かした
アクティブラーニングの授業実践― (3) ―・・・・・・ 3
4. メディアの発信力を生かした
アクティブラーニングの授業実践― (4) ―・・・・・・ 4

IV. 実践的研究の成果と課題

1. 実践的研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
2. ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
3. 新聞というメディアを基軸とした児童の学び・・・・・・・・・・・・ 4
4. 今後の展開・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

主要参考文献・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

I. 問題の所在

1. 問題の所在

2016年12月21日、中央教育審議会の答申が出された。今後の学び方の転換を迫る大きな改革の波が学校現場にも来ている。今回の改革の根拠の一例として挙げられているのが「2030年問題」だ。少子高齢化の進行が起こり、65歳以上の人口が3割を突破する。

その高齢者を支える世代も現在より減少し、国力の低下が予測される。今ある仕事が機械に置き換えられ、今ない仕事が今後生まれてくる。また、今以上に「グローバル化」や「IT化」が進むことも予測されている。今、教室で学んでいる小学生が社会人になるときには、働き方そのものが変わっているかもしれない。

また、本答申は日本の子どもの学びについて課題を指摘している。それは、日本の子どもたちは基礎的な知識はあるが、主体的に学ぶという態度に関しては国際的に低い数値を示しているということだ。そのような中で、「アクティブ・ラーニング」という学びが注目されている。また、これからの学校教育では「社会に開かれた教育課程」が重要であるとされている。

2. 新聞というメディアを基軸とするアクティブ・ラーニングの授業展開の構想

「書きことば」のメディアである新聞を基軸とすることに関して、教育心理学者の岡本夏木(1985)¹は、「書きことばは、話しことば以上に自己表現性が強い」「書くことによって、子どもは自己というものが表現できる存在であることを知ってゆく」と述べ、さらに「二次的ことば(書きことば)への強制が本格化してくるのは、まさに小学校の中学年」とも示している。4年生段階で、書きことばのメディアである新聞を活用して、自分の考えを他者に表現できるということに気づくことは重要である。

¹ 岡本夏木『ことばと発達』岩波新書 p120,121 1985

また、新聞というメディアを活用することで、身近なことや興味を持ったことを積極的に発信することができるようになる考えた。その過程で、児童は記者の立場に身を置くことで情報発信の担い手となり、積極的な取材活動や文章表現活動を展開し、主体的な学習活動を成立させることができるのではないだろうかと考えた。

II 新聞というメディアの発信力を生かした授業実践

ー1学期の授業実践ー

1学期の授業では、新聞の記事を書くという単元を段階的に設定した。

1. 協働学習導入の授業

ーグループ音読の学習ー

詩「水平線」 物語文「こわれた千の楽器」 (4月)

詩「水平線」ならびに物語文「こわれた千の楽器」では、まず本文の心に残った文章を視写する活動から入った。グループで話し合いをする際には、お互いの考えを適切に相手に伝えることが大切である。まずは自分の考えを構築してからではないと、いきなりグループでの話し合い活動はできない。特に国語に苦手意識を持つ児童にとっては「心に残ったところを視写する」という活動は単元の導入としては有効である。

詩「水平線」はグループごとに創意工夫した群読、「こわれた千の楽器」では登場人物がたくさん出てくることから、グループで役割読みを行わせた。その際、「どの場面を音読するのか」「どのように工夫するのか」「どのように役割分担をするのか」について、グループで話し合うようにさせた。結果として、それぞれの場面で自分が感じたことや考えたことをグループで交流することができていた。協働学習については、まずは個人学習での「気づき」をもと

にグループでの活動を行うことで、協働学習の基盤づくりはできたのではないかと考える。

2. 新聞というメディアの発達力を生かした授業実践—（１）—

単元名「助け合って生きている生き物について新聞づくりをしよう」（５月）
教材名「ヤドカリとイソギンチャク」

新聞づくりの導入の単元として設定した。「お互いに助け合っている生き物について新聞づくりをする」という明確な目標があったので、児童はそれに向けて学習を進めることができた。児童は、国語の時間に限らず休み時間や放課後にも図書館を訪れ、資料を集めたりしていた。これは、自ら課題設定したことに対して、何としても解決したいという気持ちの現れである。他の児童とは違う自分のテーマ設定を行うことで、発信者としての意欲が湧き、前向きに学習に取り組む児童が多かったのではないかと考えられる。この授業では、「見出し」の工夫という課題が残った。

3. 新聞というメディアの発達力を生かした授業実践—（２）—

単元名「走れ新聞を書こう」（６月）
教材名「走れ」

この授業では、記者の視点で記事を書くことをねらいとして、運動会というテーマが題材の「走れ新聞」をつくることとした。記事を書く際には、実際に物語文の内容をまとめる作業をするだけでなく、記者としての目線で書いている児童もいた。新聞というメディアを通して相手を意識して書くことの重要性を感じている児童も増えてきた。

このように、全体として、新聞の記事を書く際に必要な知識を習得した上で、それぞれの児童が自分の言葉で記事を書くことができていたようである。また、見出しづくりに関しても、前回の学習よりも児童が慣れてきたと言える。

新聞というメディアを考えたとき、児童自身が身近な人に実際に取材をして、記事を書くという学習活動を構成する必要がある。

4. 新聞というメディアの発達力を生かした授業実践—（３）—

単元名「お役立ち新聞を書こう」（７月）
教材名「みんなで新聞を書こう」

この授業では、「お役立ち新聞」をつくるということをゴールとし、身近な人に取材活動をして新聞の記事を作成することをねらいとした。これまでA6サイズの新聞原稿を用いていたが、この授業では、こちらが作成したB4サイズの新聞原稿を用いた。左にはお役立ち情報についての記事、右には1学期に頑張ったことを記事にさせた。その際、「見出し」の工夫をするように指示をした。「走れ新聞」の学習で見出しによって読者を惹きつけることができることを学んでいるので、それぞれの児童が工夫を凝らしながら「見出し」を考えていた。また、この授業では、基本的に文字で情報を伝えることを大切にした。そのことによって取材したことを、いかに読者に正確に文字によって伝えることができるのかを一人一人が意識して取り組んでいる姿が見られた。

Ⅲ メディアの発信力を生かしたアクティブラーニングの授業実践

2学期は、「話しことば」や「書きことば」などあらゆるメディアを活用して、より社会に開かれた形に児童が発信していく授業展開を行った。

1. メディアの発達力を生かしたアクティブラーニングの授業実践—（１）—

単元名：あれば便利な文房具を考えて、発表しよう（９月）

教材名：広告と説明文を読みくらべよう。

本実践では、実際にあれば便利な文房具を4人1グループで考えて隣のクラスにプレゼンテーションをすることを単元のゴールとした。4人1グループで「あったら便利だと思う文房具」を考えるとという活動や、それを広告にする学習はとても積極的に取り組んでいたようである。それも単元のゴールに「隣にクラスに発表をしに行く」という意識が児童にあったことが関係すると考えられる。隣のクラスでの発表とは、一見すると簡単のように考えられるが児童にとっては非日常的なことである。その非日常的环境で自分たちの考えた広告を発表するという意識がグループでの話し合いも積極的に行われたのではないかと考える。

課題としては一人の児童が文房具を提案して、その児童を中心として話し合いが進んでいた。他の児童が少し取り残されたような形になったようである。また、振り返りに「もっと大きな声を出せばよかった」と技術的な振り返りが見られた。

**2. メディアの発進力を生かしたアクティブ
ラーニングの授業実践—（2）—**

单元名 「ごんぎつねのCDをつくろう」
（10月）
教材名 ごんぎつね

本実践では「ごんぎつね」のCDを作り、全校放送で流すという単元のゴールを持って学習を開始した。児童の多くがCDを流せたときの達成感があったようである。物語文「ごんぎつね」の学習で自分たちのCDを作成してそれを全校児童に聞いてもらうという活動に意外性と不安感を持った児童がいた。しかし、実際に学習を進めていくと、全校児童にCDを流したいという児童の声が多く聞かれるようになった。相手意識を持ち、取り組むことができていた。自分の話しことばが全校児童に聞いてもらえるという機会は滅多になく、それだけに単元

のゴールで校内放送をするという活動は学習をより前向きに行う契機になったのではないかと考えられる。児童の振り返りに「声が小さかった」というものがあった。前回の「あれば便利な文房具づくり」の授業実践の際にも言語技術の面にばかり振り返りを書いていた児童もいた。

**3. メディアの発進力を生かしたアクティブ
ラーニングの授業実践—（3）—**

**单元名 「くらしの中の和と洋新聞を作り、日
本の暮らしを発信しよう」（10月）**
教材名 くらしの中の和と洋

本実践では、各グループが追求テーマを持って新聞記事を完成させるという学習活動を行った。新聞記事を書く過程で、児童が記者になり取材活動をする中で自ら情報を発信していくという気持ちになっていった。また、身近な人に取材活動をしたり本を使って調べ学習をしたりする中で、今まで知らなかった「日本のよさ」に気づくことができた児童も多かったようである。グループで協働学習をする際に、特定の児童のみが調べ学習をするといったことがあった。例えば「旅館とホテル」グループでは、一人の児童が父親に取材をして情報収集をした。その他の児童はその情報を共有したのだが、自ら情報を収集する機会がなかった。

**4. メディアの発進力を生かしたアクティブ
ラーニングの授業実践—（4）—**

单元名 世界一〇〇な絵本を作ろう
（11月）
教材名 世界一美しいぼくの村

物語文「世界一美しいぼくの村」で、起・承・転・結という構成を学んだ。その後、単元のゴールをグループで絵本を創作することとした。絵本作りの題名を「世界一〇〇な」で始めさせた。

絵本を1つの造形と考えた時に、表紙があり本文があり、絵がある。物語の内容によって速

く読むところがあったり、ゆっくりと読むところがあったりする。そのような創造性を生かしながらグループで書き上げることが出来るところに魅力を感じていた。自分たちの考えたことを絵本というメディアを通じて表現できた。

IV実践的研究の成果と課題

本章では1学期及び2学期に実践した国語科授業を、学期ごとに振り返り、その中で児童の学びがどのように変容したのかを述べていく。明らかにした成果と課題を基にして今後のアクティブ・ラーニングの授業実践の展望を示したい。

1. 実践的研究の成果と課題

1学期の授業実践は、新聞というメディアを基軸としてそれを段階的に指導していくことを主眼とした。そのことにより、「児童は自らの考えを発信することやそれに向けての協働学習は楽しいものである」という発信者としての基礎力を付けることができたのではないだろうか。事実、6月の「走れ新聞」の授業実践を行っている時に、児童たちが自主的に「新聞サークル」というグループを結成して、新聞づくりを始めた。このような取り組みからも、児童が新聞というメディアに興味・関心を持ちそれを活用して自ら情報発信していることが分かる。

2学期では、より**社会に開かれた場**に発信していくことを念頭において授業展開を行った。結果、「世界一〇〇な絵本を作ろう」の授業実践では、学級内で完成した絵本を交流する予定であったのが、「みんなに読んでほしい」という声が多数あがった。このような声があるのは、継続して全校に発信することを目指していたためだと考えられる。このよう

に1学期、2学期の授業実践を振り返ると1学期に段階的に行った新聞作りの授業が基盤となり、2学期においても児童が「より開かれた社会」へと自分たちの学習成果を発信することを目標にすることで学習がアクティブラーニングになっていったと言える。

以上のことを、図にすると以下のようになる。

IV実践的研究の成果と課題

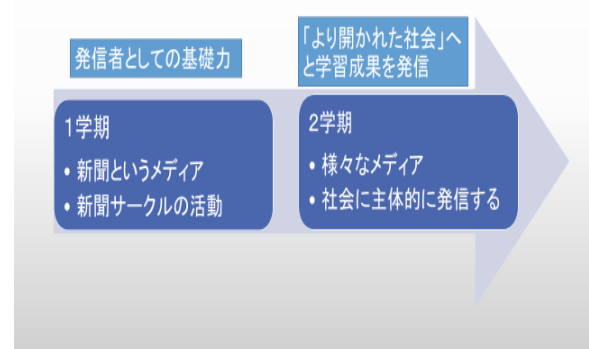


図1 実践的研究の成果と課題

2. 新聞というメディアを基軸とした児童の学び

本実践研究では、1学期から2学期にかけて新聞というメディアに着目し、段階的な学びをめざしてきた。そこで、学級の中の一人の児童（Cとする）が作成した新聞に着目しながら、その学びの変容を示したい。

説明文「ヤドカリとイソギンチャク」

お互いに助け合っている生き物について、調べ学習をし、新聞にまとめた。図書館の本やインターネットを使用したため、児童にとっては難解な言語があったようである。記事では、生態系に関する本の引用と感想に分けることができる。感想には「いろいろな生物、食物、生きる人間がたがいに助け合っていることがわかりました」とある。しかしながら引用した文章が、児童の生活体験とはかけ離れており、実感を伴った感想になっていないと考えられる。

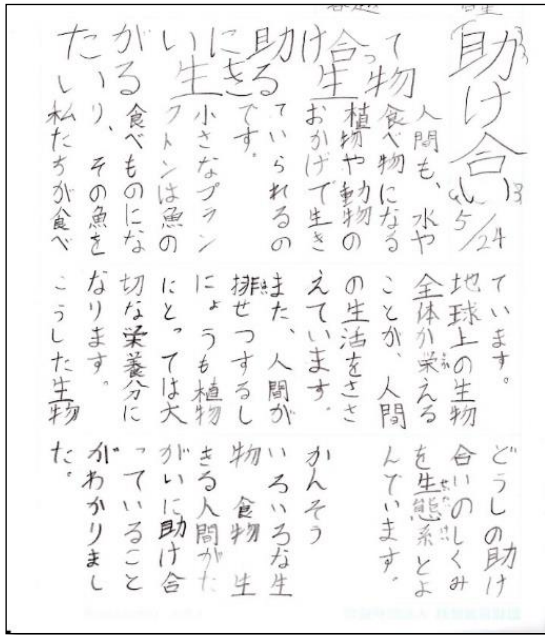


図2「ヤドカリとイソギンチャク新聞」

物語文「走れ」

新聞というメディアの特性上、記者になり取材をするという段階は必要であると考えた。記者になるという特別感を持たせるために物語文「走れ」では、中心人物「のぶよ」にインタビューをした。記事の出だしが「ぼくは走っているときの気持ちをしゅざいしにいきました」になっている。これは、新聞というメディアを通じて情報を発信していくという

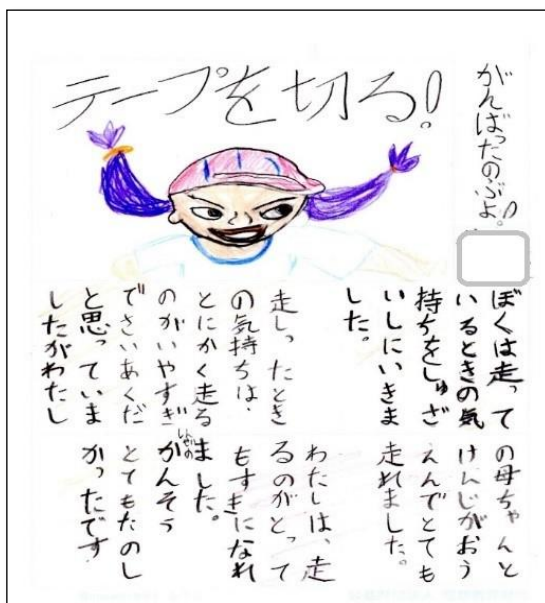


図3「走れ新聞」

気持ちの表れともとれる。また、記事の「なか」の部分では「のぶよ」へのインタビュー内容が記載されている。「母ちゃんとけんじのおうえんでとても走れました。わたしは走るのがとってもすきになりました。」とある。

教科書には、中心人物である「のぶよ」が、母と弟の応援を受けて苦手な徒競走を最後まで走り切るという描写がある。しかしながら、「走るのがとってもすきになりました」という描写はない。これは、中心人物「のぶよ」にインタビューをするという学習から生まれた創造的な読み方であると考えられる。

お役立ち新聞を書こう

「お役立ち新聞」では、相手意識を明確に持って、実際に取材活動をおこない新聞づくりの活動に取り組んだ。「ヤドカリとイソギンチャク」や「走れ」では、教科書教材を使用して、調べ学習をしたり、物語文の主人公にインタビューをしたりした。身の回りの人インタビューをして、それを新聞記事にまとめるという学習活動に取り組むことで、情報発信することに対してより意欲的になることができたのではないか。図4の新聞は、協働で取材活動を行い記事をまとめたものである。

「まあとみい」とは、校区にある駄菓子屋である。その駄菓子屋に取材活動に行き、何が一番売れているのかを記事にまとめている。記事にも、「みなさん何が一番売れているかきになりませんか。ではおしえます」という表現からも、学級の児童に、興味のある情報を発信できているという気持ちが表れている。実際に取材活動を行うことで、知った情報を伝えたいという気持ちが児童の中で大きくなってきたようであった。また、「二人の感想」にもあるように「こんな昔からできているなんてすごいと思った」「ぼくはガムとスルメが売れていると思わなかった」のように、取材活動をする中での発見もあったようである。

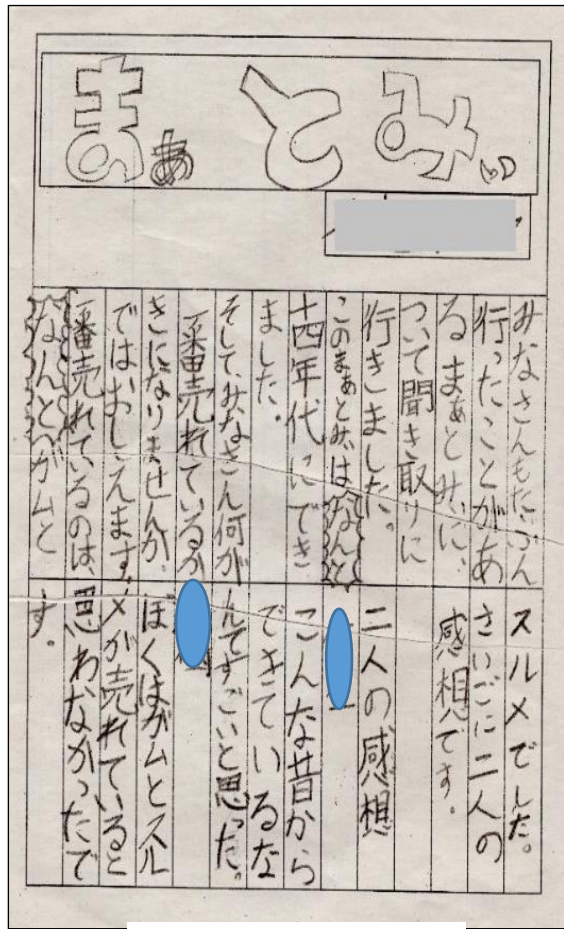


図4「お役ち新聞」

説明文「くらしの中の和と洋」

2学期の「くらしの中の和と洋新聞」では、出来上がった新聞を全校に発信することを目指しに取り組んだ。本実践でCは、グループの中で中心的な役割を果たすことができた。Cのグループは4人で、「旅館とホテル」について調べた。比べる観点は料理である。旅館とホテルの料理の違いを見出しで「昔ながらのお・も・て・な・し」「ゴージャスなお・も・て・な・し」と対比して表現している。このように、新聞記事の内容を、分かりやすく、対比も交えながら見出しにまとめる力がついてきたと考えることができる。また、新聞記事の構成に関しても、「はじめ」になぜ旅館とホテルを調べようと思ったのかを述べているのに続き、「なか」には、旅館とホテルそれぞれについて調べたことを「まず」「次」「最後」と順序を明確にして記載している。「ま

ずちようみりょうについてです」「次に食べ物についてです」「次はおおぜいで食べる時の言葉です」「最後は食べる順番です」と、記事の内容がすべて対比になっている。このように比べる観点を明確にして、取材活動をして、それを新聞記事にするという学習活動を行うことができる。

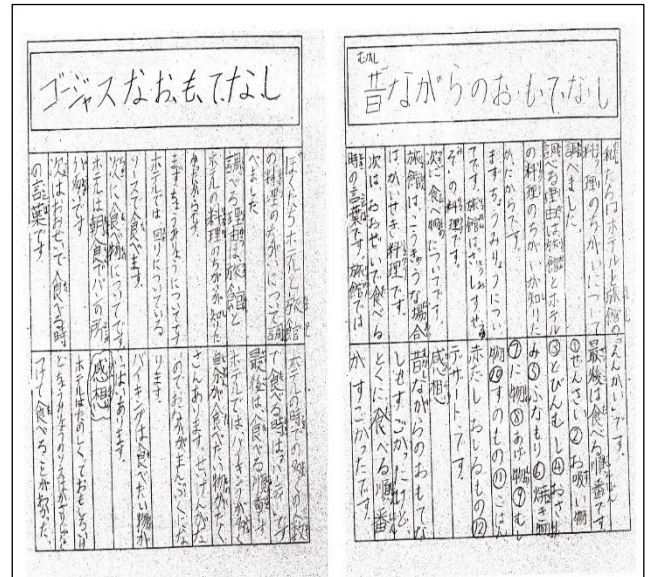


図5旅館とホテルに関しての記事

3. 今後の展望

中央教育審議会答申(2016)の引用によると、

形式的に対話型を取り入れた授業や特定の指導の型を目指した技術の改善にとどまるものではなく、子供たちそれぞれの興味や関心を基に、一人一人の個性に応じた多様で質の高い学びを引き出すことを意図するもの(p26)

とある。子どもの学びをよりアクティブにするためには形式的な指導ではなく、学級の児童が何に興味・関心があるのかを指導者が見極めて題材を選択する必要性も出てくる。

2学期の授業実践において「いちばん楽しかった活動」として絵本作りを挙げている児童が多かった。自ら考えたことを発信する際も、児童にとってより身近なものの方が児童の学習が主体的になっていくのではないかと考える。

2 学期の授業実践では、隣のクラスや全校児童に向けて発信を続けた。その結果、他学年の児童や教師から感想を言ってもらえたようである。このように「自分たちが発信できたことの満足感」や「読み手あるいは聞き手からの肯定的評価」があることで、児童が次の学習成果を発信する原動力にもなっていた。この二点をより児童が感じられる授業展開を行うことが今後、児童の学びをよりアクティブにするために必要ではないかと考える。

主要参考文献

- ・中橋雄 「メディア・リテラシー論」 北樹出版 2014. 4
- ・スー・F・ヤング、ロバート・J・ウィルソン「主体的学びにつなげる評価と学習方法」 東信堂 2013. 5
- ・日本国語教育学会「国語単元学習の創造と理論編」 東洋館出版社 2010. 8
- ・佐藤学「学校の挑戦 学びの共同体を創る」 小学館 2006. 3
- ・岡本夏木 「子どもとことば」 岩波書店 1982. 1